

## ねがいのいえニュース 第62号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2022年4月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



未だ収束の兆しが見えないパンデミックの世に、大国の暴挙による戦争も始まってしまったこの世界は、一体これからどこへ向かおうとしているのでしょうか。人々の暮らしが困窮すれば税収を財源としている福祉サービスも破綻するかもしれません。私たちの暮らしは、未来は、幸せは守られるのか、不安が尽きない毎日ですが、誰もが人の優しさと誠実さを信じて、一日一日を生きていくしかない気がしています。

### 社会福祉法人ねがい始動へ

2021年度の補助金を受けられることが決定し、グループホームの整備と社会福祉法人の設立が決まったものの、コロナ禍による影響で順延となり、再び市議会の決定を待つことになりましたが、このたび、2022年度に持ち越して補助を受けることが正式に決まりました。およそ半年遅れになりましたが、新しいグループホームの建設が始まります。新法人はすでに設立しておりますが、現NPO法人でおこなっている全事業の移行は7月の予定で始動しました。

NPOから社会福祉法人に移行しても実態はほとんど変わることはなく、これまで通り誠実に事業運営を続けるのみです。これまでに築いてきたみなさまの信頼を裏切ることのないよう、なお一層励んでいく所存ですので、これからも応援よろしくお願いします。

### 2022年度の新規事業

コロナ禍により2年間止まっていた新規事業の計画が一気に動き出し、後ろ倒しとなったため4本の事業が2022年度に同時進行することになりました。

2022年度の新規事業は以下の4件です。

#### ① グループホームほほえみそう

定員9名の女性棟 現在稼働中の男性棟にぎやかそうの隣に建設中 8月開所

#### ② グループホームあったかそう

定員5名+ショートステイ2名 さいたま市補助金事業により4月着工 10月開所

#### ③ 児童発達支援センター

医療的ケア児や重症児中心の定員15名 ねがいのいえのびのび保育園に隣接

親子ひろばも設け障害の壁を越えたインクルーシブな保育環境を目指します  
心理士による個別療育も用意しています

#### ④ 生活介護ハナミズキ

医療的ケアの必要な方が通うことができる重心者対象の生活介護 定員20名  
特殊浴槽を設置し入浴のニーズにも対応します 2023年1月開所  
また、マッサージの専門員を配置し、筋の緊張をほぐし拘縮を予防します  
さらに、プールを造設し、運動不足になりがちな重度者の全身運動を促します

### 就労支援B型ニコニコふぁーむ閉所

一方で、13年おこなってきた就労支援事業所ニコニコふぁーむを、諸事情により閉所することになりました。世の就労支援が目覚ましい発展を遂げ工賃を上げていく中、重度障害者への手厚い支援が得意な私たちは、利益を上げる事業運営が苦手な弱点を露呈し、十分な工賃を保証できなかったことを申し訳なく思っております。

利用されていた方々には寂しい思いをさせてしまうことになりましたが、みなさまがこれからの人生を、少しでも収入を高める力を身に付け、想いを実現しながら生きられるよう願っております。



### 世界は子どもから変わる

前々回の制度改正で、国を挙げて共生社会を目指すと言いが出されてからはや数年が経ち、日本社会は大きく変わったのだろうか？障害者のグループホームや依存症からの更生施設を建てようとするれば、今も近隣住民の激しい反対運動があちこちで起きている。

自分が大学生の時のゼミで「この差別や偏見をなくすには、子どもの時から様々な人が一緒に育つのが普通になり、その子どもたちが大人になった時にようやく社会は変わる。それには百年かかるかもしれない」と発表した。

あれから40年経った。特別支援教育は障害のある子どもたちをバスに乗せて運び、それぞれの町から離れた一ヶ所に集めた。21世紀になってから制度の進んだ障害福祉サービスは、児童発達支援に始まり、放課後デイ、卒業後の生活介護まで整備され、障害児者だけが集まる安全な場が用意された。ひと昔前なら通常の保育園や学童保育に必死の努力をして入所させてもらったが、今は、いじめや差別に会うリスクをおかしてまで通う必要がなくなった。障害の壁を取り除くどころか、隔絶はさらに進んだかのように見える。

マスコミはインクルーシブな社会への関心を促すように、良質なドキュメンタリーやドラマなどが数多く放送され、障害に縁のない市民も理解する機会が増えた。しかし反対住民となる人々には、そのような情報はまるで一切届いていないかのようである。医療的ケアの必要な児童が普通級で学びたいと望む記事が出れば、「親のエゴ」「何のために特別支援教育があるの

か」「先生に負担をかけるべきではない」などという書き込みが並ぶ。

自分の目で当事者の姿を見て、自分の耳で当事者の想いを聴いたわけではない人たちが、インターネットの普及したこの世界では、自己の持つ観念や主張を自由に拡散してしまう。そんなこの世の中で、共に生きる、地域で普通に生きる、という言葉が口にする人たちは、具体的にどのような世界を想い描いているだろうか。

## 児童館の原風景

心の中に、忘れられない風景がある。

大学2年生の時、ボランティア活動を始めた。毎週土曜日に障害のある子どもたちと一緒に遊ぶという活動だった。主に学生が中心だったその活動は、全国にボランティアブームが巻き起こる少し前のことだった。障害福祉の制度が生まれるずっと前の時代、今から40年前のことである。

あちこちの公園や公民館などで同じような活動が行われていたが、そのグループが他と違ったのは、活動の場が児童館であることだった。地域の子どもたちが自由に集まるその場所で、人を笑わすのが得意なダウン症の子は障害のない子に囲まれて人気者だった。障害の子のために集まってきたボランティアも地域の子と仲良くなり一緒に遊ぶ。重度障害の子は健常の子と対等に遊ぶのは難しかったが、ボランティアのお兄さんやお姉さんに見守られながら、そこにいることが自然な存在になっていた。

子どもたちの喧騒に反応しパニックになることもある。ある日のこと、2人の自閉症児が同時に大パニックを起こし大騒ぎになった。障害のない子どもたちには理解できず、「障害児なんかもう来るな」と怒号が飛んだ。学生ボランティアにとっても意気消沈する大事件だった。しかし翌週はいつもと同じように集まり、自然に遊びが始まる。誰ひとり根に持つ子どもはいなかった。いつもと同じ笑顔と優しさがそこにあった。

バラバラなピースが集まってひとつのピクチャーになる、そんな想いが込められた「ジグソー」という名のボランティアグループは、40年を経て、今この社会が目指すべき超未来の姿であると思えてならない。

あの風景を再現したいと、今、切に願っている。社会福祉法人ねがいが今年設立する児童発達支援センターは、地域に開放するフリースペースを設け、親子ひろばを開設する。そこには近隣の子育て親子が自由に訪れ、障害の子たちと同じ空間を共有する。園庭を挟んだ隣にはねがいのいえの保育園があり、園庭の遊びで混ざり合う。

次は放課後デイを建設し、そこに設けたフリースペースを児童館として地域に開放するのが夢である。障害のない子たちと出会えばいじめに遭うかもしれないと不安に思う保護者のみなさまから、支持を得られるかどうかはやってみなければわからない。しかし、地域を変え社会に貢献することを目指す福祉事業所は、利用者の要望に応えるだけではない。障害のある人だけが集まる場は安全だが、その壁を崩さなければ、やがて地域で暮らしたいと願った時に反対



に遭うこの社会を変えることができない、という理念を提唱する役割を我々は担っている。

## 卒業生を送る会

今年もまた卒業生を送る季節がやってきて、春休みが始まった日、恒例の送る会をおこなった。今年の卒業生の中に、重度の知的障害、自閉症の、あつしくんときょうくんがいた。言葉を持たず、時々激しいパニックを起こす似たタイプのふたりが、奇しくもこの日の主役である。緊張に加え幼児の泣き声に弱い点も共通のふたりが、送る会を前にふたりそろって激しめのパニックを起こし、スタッフがそれぞれに個別に対応した。スタッフは日頃から研鑽を積んでい、体の緊張をほぐし心を癒す方法を試みる。ふだんからよくある光景だったが、きょうくんはこの日、あとに続く主役の座を意識しているのか、いつもより手ごわい緊張感だったためベテランの指導者も体ほぐしを援助した。ほどなくして緊張が和らいだところで自分からみんなの場へ戻ろうとする意志を表した。集団プログラムに戻ってからも何度か寝転がり、自由にならない行動が見られたが、表情には余裕があり先ほどよりずっと楽になったようだった。



送る会が始まると、ふたりとも落ち着いて着座を続けることができた。理事長から卒業証書を渡される時には、ふたりとも嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

最後に、卒業生のみなさまから挨拶とこれからの抱負をいただいた。あつしくんは午前中、コミュニケーション訓練の時間に筆談で自分の想いを言葉で表していた。この筆談の練習はふだんからプログラムとしておこなっていたが、あつしくんはすぐに立ち歩くことが多くなかなか表現してくれない。しかしこの日は、自分から積極的に取り組みずらずらと書いてくれた。その言葉をスタッフがみんなの前で読み上げた。

「ねがいのいえは、つらいときもかなしいときも、ぼくのことをおうえんしてくれました。

たくさんひととであうことができました。

たくさんをいっしょにのりこえてきたので、これからもなにかがあってもだいじょうぶです。これからもよろしくおねがいします。」

15年前、お父さんの病気を東京で治療するために、遠い地からお母さんの実家があるさいたま市へやってきたあつしくんはまだあどけない幼児だった。しかし重度の障害を背負うあつしくんには、悲しみも環境の変化も人一倍苦しかったはずで、それに起因する行動障害は学校でも他の事業所でも理解されないことが多かった。そのあつしくんが、手をつけられないくらい大変な強度行動障害の大人にならずに成長できたのは、お母さんの愛情と、ねがいのいえスタッフの寄り添う支援があったからに違いない。

出会った人の生涯に寄り添うねがいのいえは、卒業後の暮らしもずっと支えています。

